

「浅間山の火映現象復活(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

活動中の活火山の火口壁の中を観察するのは、容易なことではない。山頂まで登るか、ヘリコプターをチャーターするしかなく、いずれも素人には非現実的である。傾斜計や地震計での観測は、さらに大規模で予算も億単位になる。夜間の火映観測は、素人でも低予算でできる、唯一の現実的な火山観測と言える。



2017年1月19日に復活した浅間山の火映現象は、その後一旦終息したかに見えた(上写真は1月25日未明)。しかし、1月26日になって再燃し、今回の一連の火映現象の中で、最も強い火映が観測された。

今回観測した火映現象は、浅間山の火映としては、ごく微弱なものである。恐らく肉眼での観察は困難だろう。下写真2009年2月17日に、同じカメラで撮影された、最強クラスの火映である。まるで噴火のように見えるが、火口底の灼熱の反映である。これと比較すると、今回観測されたものが、いかに微弱なものかよくわかる。



一方で、1月27日は新月である。満月・新月前後は、月の潮汐力(引力)が最大となる。火山のマグマも流体なので、影響を受ける。浅間山2004年、2009年の噴火も満月前後に起きている。注意深い観測が必要だろう。

(下写真)「やや強くなった浅間山の火映」
2017年1月26日 / 北軽井沢栗平 / C.Tanaka
デジタル一眼レフによる遠隔撮影

